様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 31 日現在

機関番号：32701
研究種目：若手研究（B）
研究期間：2008～2011
課題番号：20720081
研究課題名（和文）ヴィクトリア朝の出版形態がトロロプの小説に与えた影響について

研究課題名（英文）The influence of the Victorian publishing formats on Trollope's novels

研究代表者
委文　光太郎（SHITORI KOTARO）
麻布大学・獣医学部・講師
研究者番号：70367241

研究成果の概要（和文）：本研究では、ヴィクトリア朝を代表する小説家の一人であるアントニー・トロロプが３巻本以外の形で最初に発表した作品を主に取り上げて、自筆原稿や作業日誌もあわせて検討しながら、ヴィクトリア朝の多様な出版形態が彼の作品にもたらす影響の有無を考察した。その結果、トロロプが出版形態に少なからず影響を受けると同時に、それを利用することで、彼独自の執筆スタイルを確立させていったことが明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：This research has explored the influence of the various Victorian publishing formats mainly on Anthony Trollope's serial novels. By analyzing not only the novels but also the autograph manuscripts and the working diaries, it turned out that Trollope successfully adapted himself to the publishing system and established his own writing style.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	600,000	180,000	780,000
2009 年度	500,000	150,000	650,000
2010 年度	500,000	150,000	650,000
2011 年度	500,000	150,000	650,000
総　計	210,000	630,000	2,730,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学、英米・英語圏文学
キーワード：英米文学、アントニー・トロロプ

１．研究開始当初の背景

連載形式などで最初に発表された作品であっても、研究者を含めた現代の私たち読者は１冊の本として通読することが多く、これにより執筆時の作家の意図や当時の読者の読後感から大きく乖離してしまう危険性は否定できない。キャスリーン・ティロットソンは、当時のヴィクトリア朝における分冊出版と現代の出版形式との違いに言及し、もし

各号の区切りが現在の作品に明示されていなければ、それは作家に対する「不当な仕打ち」だと指摘している。彼女のこの発言は50年以上も前のものだが、私たちはそれを現状への警鐘と捉える必要がある。

そこで、ヴィクトリア朝におけるさまざまな出版形態が、当時の小説に与えた影響を明らかにすることを最終目標に設定した上で、本研究申請の準備段階として、3 巻本で発表されたトロロプの『リッチモンド城』(1860)の執筆スタイルに関する分析をした結果、『コーンヒル・マガジン』創刊号の巻頭に掲載されて人気を博した『フラムリー牧師館』(1861)から彼は連載形式で作品を書き始めたとする従来の見方は誤りで、前作の『リッチモンド城』において 3 章を 1 号とする連載形式がすでに試されていたことが判明した。この研究成果は個人的に満足のいくものであったが、ただひとつ残念な点があった。それは、この論文の執筆に際して、オックスフォード大学ボドレアン図書館所蔵のその作品の作業日誌を実際に見ることができなかったことである。私は、ジョン・サザーランドやメアリー・ハマーの研究書に記されていたその作業日誌の断片的な情報を頼りにするしかなかった。とりわけトロロプは、細かい日々の進捗状況などを頻繁にメモに残していたので、そうした一次資料の閲覧と分析は研究上欠かせないものであった。

また、トロロプは当時の英国社会でディケンズらと並んで最も広く読まれた作家の一人であり、なおかつ現在でも彼の数多くの作品が英国内で読まれている。それにもかかわらず、日本国内での翻訳は近年になってようやく開始されたにすぎず、研究者の数も極端に少ないのが実情である。ヴィクトリア朝における多様な出版形態が、小説に与えた影響を明らかにするためには、当時の人気や作品数の点から見ても、トロロプの作品分析は必要不可欠であるが、本研究開始当初、そうした研究はおこなわれていなかった。そのため、作品だけでなく海外の図書館に所蔵されている自筆原稿や作業日誌までを考察対象とする本研究の重要性ならびに独創性は、十分にあるものと思われた。そこで、当該研究課題を申請することにした。

２．研究の目的

本研究の目的は、ヴィクトリア朝における多様な出版形態が、当時の作家たちの中心的存在の一人であったアントニー・トロロプの作品にどのような影響を及ぼしたのかを解明することにある。彼の作品は、3 巻本に始まり、連載出版、月間分冊、週刊分冊など、実に多様な出版形態により発表されているため、それらの形式による作品をひと通り取り上げて、作品を解釈する必要がある。本研究では、それらすべての作品解釈を終えた後に、彼の作品がヴィクトリア朝の出版形態から受けた影響とは果たしてどの程度のものであったのか、また、その影響とは具体的にどのようなものであったのかを明らかにする。

３．研究の方法

研究対象となる作品を、英米の図書館に所蔵されている自筆原稿や作業日誌などと詳細に照らし合わせながら、分析と考察をおこなう。

４．研究成果

本研究期間内に、雑誌への連載、週刊分冊、2 巻本、すべての号が 2 章立てというそれぞれ異なる形式で発表されたトロロプの小説を取り上げて、作品への出版形式の影響の有無を考察した。詳しくは以下の通り。

(1) 初の連載形式により発表された『フラムリー牧師館』(1861)と、それとほぼ同時期に書かれて 3 巻本として出版された『リッチモンド城』(1860)の両作品間の隠れた連関を探るため、『フラムリー牧師館』の作業日誌の裏面にメモ書きされていた各章のタイトルの一覧に注目した。その結果、そこには空白部分や変更箇所が存在しており、トロロプが当時不人気だったアイルランドを舞台とする小説を読者に好意的に受け入れてもらうため、『フラムリー牧師館』において副牧師のクローリーが初めて登場する号と、『リッチモンド城』の出版日を意図的に近づけようとした可能性があることがわかった。そこで、この研究成果を「アイリッシュとしてのクローリー家：Trollope の *Framley Parsonage* と *Castle Richmond*」(『テクスト研究』第 5 号)として論文にまとめた。

(2) 初の週刊分冊形式により発表された『最後のバーセット年代記』(1867)を取り上げて、分冊出版というスタイルがこの作品に及ぼす影響について考察した。その結果、32 号からなるこの作品のほぼすべての号において、

登場人物による類似または対照的な行動を挿入することにより、長い物語の一部分にすぎない 1 つの号に、個としての一体感を持たせようと試みられていたことが明らかとなった。そこで、この研究成果を「「まとまりあるもの」を求めてートロロプの『最後のバーセット年代記』」(『英米文化』第 40 号)として論文にまとめた。

さらに、『最後のバーセット年代記』の主人公が英国国教会の副牧師であったことから、この小説の発表直前に『ペルメル・ガゼット』紙に連載されていたトロロプの『英国国教会の聖職者たち』(1866)も考察対象として取り上げた。そして、当初の予定にはなく急遽追加されたあるひとつの章が、『最後のバーセット年代記』の着想の源であることを示唆する内容であることが明らかとなった。そこで、この研究成果を「追加された 2 つの章：Trollope の *Clergymen of the Church of England*」(『ヴィクリア朝文化研究』第 7 号)として論文にまとめた。

(3) 雑誌への連載や分冊出版という形式をとらず、2 巻本で出版された『マッケンジー嬢』(1865)に焦点を当て、自筆原稿と作業日誌を参照しながら、その作品が実際にどのように執筆されたのかを詳細に検証した。その結果、出版社との契約通り 2 巻本で出版されたにもかかわらず、この作品が 3 つの章を 1 号とした全部で 10 号からなる連載形式を想定して書かれていたことが判明した。そこで、この研究成果を「連載小説としてのトロロプ『マッケンジー嬢』」として論文にまとめ、『ヘルメスたちの饗宴ー英語英米文学論文集』に投稿した。

(4) トロロプの作品には非常に珍しいことに、すべての号で 2 章立てが採用されている連載小説の『ベルトンの屋敷』(1866)を取り上げて、その 2 章立てという構成がこの作品にもたらす影響について考察した。その結果、『ベルトンの屋敷』では登場人物が少ないことも作用して、1 人の女性をめぐりライバル関係にあった 2 人の男性の対照的な性格や行動ばかりが強調され、全体的に単調な印象を与えていたことがわかった。

この作品以降、晩年に書かれたあるひとつの短い作品を除き、トロロプがすべての号を 2 章立てとする手法を使用することはなかったが、『ベルトンの屋敷』の翌年に発表された彼の代表作のひとつである『最後のバーセット年代記』(1867)では、3 章立てと 4 章立てに交じり一部の号で 2 章立てが使われている。そこでさらに、この作品における 2 章立ての号を詳細に考察した結果、2 章立てが連続して使用される時には必ず何らかの工夫がなされていることがわかった。例えば、同一あるいは異なる登場人物による類似した行動で統一された号と対照的な行動で統一された号が交互に配置されていたり、類似した行動からなる号が続く際には、すべて異なる人物に焦点が当てられていた。これらのことから、『ベルトンの屋敷』とは大きく異なり、トロロプが『最後のバーセット年代記』の 2 章立ての号において、単調な印象を避けるべくバランスを意識した最大限の配慮をしていることが判明した。そこで、この研究成果を「進化する 2 章立てートロロプの『ベルトンの屋敷』から『最後のバーセット年代記』へ」(『英米文化』第 42 号)として論文にまとめた。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 4 件）

① 委文光太郎、「進化する 2 章立てートロロプの『ベルトンの屋敷』から『最後のバーセット年代記』へ」、『英米文化』第 42 号、英米文化学会、2012 年、15－33 頁、査読有
(現時点で URL は未定)

② 委文光太郎、「「まとまりあるもの」を求めてートロロプの『最後のバーセット年代記』」、『英米文化』第 40 号、英米文化学会、2010 年、145－166 頁、査読有
http://ci.nii.ac.jp/naid/110007621767

③ 委文光太郎、「追加された 2 つの章：Trollope の *Clergymen of the Church of England*」、『ヴィクリア朝文化研究』第 7 号、日本ヴィクトリア朝文化研究学会、2009 年、35－49 頁、査読有
http://www.vssj.jp/journal/7/shitori.pdf

④ 委文光太郎、「アイリシュとしてのクローリー家：Trollope の *Framley Parsonage* と *Castle Richmond*」、『テクスト研究』第 5 号、テクスト研究学会、2009 年、20－34 頁、査読有
http://textstudies.web.fc2.com/magazine/papers.html

〔図書〕（計１件）

委文光太郎、「連載小説としてのトロロプ『マッケンジー嬢』」、『ヘルメスたちの饗宴－英語英米文学論文集』、松島正一編、音羽書房鶴見書店、2012 年、449－464 頁、査読無

６．研究組織

(1) 研究代表者
委文　光太郎（SHITORI KOTARO）
麻布大学・獣医学部・講師
研究者番号：70367241

(2) 研究分担者
（　　）
研究者番号：

(3) 連携研究者
（　　）
研究者番号：